



第 11 回研究会 2022 年 2 月 12 日

半年ぶりの開催となったスパルタンイングリッシュ第 11 回の発表者は、青森県教育庁学校教育課 高等学校指導グループの伴一聡先生です。伴先生は、僕の大学の先輩にあたり様々な研修会でもお世話になったり、大学に来ていただいてお話しいただいたり、今でもいろいろお世話になっている僕にとっては面倒見のいい兄貴分のような存在です。高等学校の学習指導要領が来年度からいよいよ実施となることを控えた今、学習指導要領の改訂のポイントについて詳しくお話していただきました。

3 学期の忙しい時期ではありましたが、青森県内の高校の先生、中学校の先生をはじめ合計 12 名の参加がありました。コロナ感染拡大防止のためオンラインの開催となったため、秋田、東京、名古屋そして遠くは熊本からの参加もあり、普段はなかなかお話しできない先生同士の交流の場ともなりました。

新学習指導要領について

- 学習指導要領改訂は、様々な答申を経て高等学校の各教科については、R 4 年度（2022 年度）から学年進行で実施される
- 「評価」については多くの高校の先生方が悩みを抱えているようである
- これまでの議論をおさらいすることで、生徒は何を学ぶか・教員はどう評価するかが見てくる

（1）今回の改訂と社会の構造的変化 —社会に開かれた教育課程の実現—

- 高校生の学力・学習意欲等の状況は、学校外の平均学習時間には、中上位層には大幅な減少からの改善傾向が見られるが、下位層は低い水準で推移している
- さらに
 - ①自尊心低い
 - ②社会を変えようとする意識低いつまり、データから見ると「自信がない」、「自分なんか何したって社会現象（構造）は変わらない」と多くの高校生が思っていることになる
- この状況下続いていくと、国際的地位の低下という懸念が出てくる
- 今後の世の中を生きる生徒は「予測不可能な世界」を生きていく
- そんな世の中を生きていくには、うんうんとうなずく生徒より発想力、独創力、どんどん能動的に動く生徒を育てていかなければならない
- そういった生徒を育てるために、教育の在り方も一層進化させる必要がある
- これからの時代を、自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質能力の育成に向けた教育目標・内容の改善
- 課題の発見解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ学習
- 育成すべき資質能力を育む観点からの学習評価の改善
- 以上のような背景から、どういった生徒をどう育てるかの背景が見えてくる



社会に開かれた教育課程

- ① 社会や世界の状況を広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会とその目標を社会と共有していくこと
- ② これからの社会を創り出していく子ども達が、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること

(2) 何ができるようになるか —育成を目指す資質・能力—導入

- 何を理解しているか、なにができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- ポイントは「知識同士の関連付け」
⇒他の教科や生活の場面でも活用できる知識
⇒生きて働く概念として習得することが大切です

(3) どのように学ぶか

—主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善）—

- 生涯にわたって探究を深める未来の創り手を送り出すことが根底にあり主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要
- 「生徒の主体的な学び」についての評価にも強く関連
- 「指導」と「評価」の一体化
- 「主体的な学び」
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」実現できているか？
- 「対話的な学び」
子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか？
- 「深い学び」と「見方・考え方」とは何か？
- 各教科等の学びの深まりの鍵が「見方・考え方」=各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方
- 「知識・技能」を「社会の中で生きて働くもの」として習得する
- 「思考力・判断力・表現力等」を豊かなものにする
- 社会や世界にどのように関わるかの視座を形成する
上で重要となる



- 「習得・活用・探究」という学びの過程の中で働かせることを通じてより質の高い深い学びにつなげるスパイラルが重要
- 授業改善について
 - 生徒の学びに資するものであると同時に「授業改善の視点」でもある
 - 「通常行われている学習活動の質を向上させること」を主眼としている
 - 教科ならではの「見方・考え方を働かせること」・「教科の専門性を生かした指導」が求められます
 - 基礎的・基本的な知識・技能は「生徒の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ね確実な習得」を重視すること

(4) カリキュラム・マネジメント —教育課程を軸とした学校教育の改善・充実—

- 学習の基盤となる資質・能力（言語能力・情報活用能力・問題発見・解決能力等）と
現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
の育成のためには

教科等横断的な学習を充実

と

単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で取得・活用・探究のバランスを工夫することが重要

- 「学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメント」を確立すること
- 学校の指導体制の充実
- 家庭・地域との連携・協働

(5) 何を学ぶか—具体的な教育内容の改善・充実—

- 「言語能力の確実な育成」が主な改善事項の最初に書かれている
- 総則でも各教科等でも「英語でも」「自らの考えを表現して議論すること」とある

(6) 何が身についたか —学習評価の充実—

- 「学力の3つの要素」と「評価の観点」とが整理がされた
- 「学習指導」と「学習評価」のPDCAサイクルを「組織的に」「現実的に」回していくことが重要



- ▶ ワーキンググループの論点としては、個別の事実的な知識のみではなく、それらが相互に関連付けられ、社会の中で生きて働く知識を含むと整理されている
 - 「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む」態度をどう評価するか
 - ペーパーテストの結果にとどまらない多面的・多角的な評価をどのように推進するか
 - 教員にとって過度な負担とならないような手立てをどのように講じるか
 - 生涯のある児童生徒の学習評価にあたって、どのような配慮を行うか
 - 言語の能力や情報活用能力など教科横断的な視点で育成を目指す

新学習指導要領高等学校外国語編について

- ▶ 「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質能力を明確にした上
 - ① 各学校段階の学びを接続させ
 - ② 「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実を図っている

- ▶ 知識がどれだけ身に付いたかではなく
 - ① 学びの過程全体を通して
 - ② 知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され
 - ③ 繰り返し思考・判断・表現することを通して
 - ④ 資質・能力が相互に関係し合いながら育成されるべき

- ▶ 科目構成の改善

平成 21 年告示学習指導要領	平成 30 年告示学習指導要領
コミュニケーション英語基礎 (2 単位)	英語コミュニケーションⅠ (3 単位)
コミュニケーション英語Ⅰ (3 単位)	英語コミュニケーションⅡ (4 単位)
コミュニケーション英語Ⅱ (4 単位)	英語コミュニケーションⅢ (4 単位)
コミュニケーション英語Ⅲ (4 単位)	論理・表現Ⅰ (2 単位)
英語表現Ⅰ (2 単位)	論理・表現Ⅱ (2 単位)
英語表現Ⅱ (4 単位)	論理・表現Ⅲ (2 単位)
英語会話 (2 単位)	

- 五つの領域の統合的な言語活動を通して総合的に指導
- 中学校における学習内容の確実な定着+更なる発信力の強化
- 複数の領域を結びつけた統合的な言語活動の5つの領域を総合的に扱うことを重視する必履修教科としての「英語コミュニケーションⅠ」の新設



- 整理された点
 - 「知識及び技能」では「英語の特徴やきまりに関する事項」
「思考力, 判断力, 表現力等」では「情報を整理しながら考えなどを形成し, 英語で表現したり, 伝え合ったりすることに関する事項」
 - 中学校における学び直し
 - 具体的な指導や評価において活用されるよう内容の構成全体を改善された
⇒CANDOリスト形式
 - 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進するため, 学習過程全体を通して, 知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し, 思考・判断・表現することを繰り返し経るような指導の改善・充実が図られる必要がある。

- 英語コミュニケーション I 「聞くこと」
 - (ア) 日常的な話題について話される速さが調整されたり基本的な語句や文での言い換えを十分に聞いたりしながら対話や放送などから必要な情報を聞き取り話し手の意図を把握する活動。日常的な話題について聞き取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動
 - (イ) 社会的な話題について聞き取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動

 - この部分から必修科目ですすでに技能統合型の活動が組み込まれていることが分かる
 - 聞くことにおいても聞くだけではない。アウトプットまで活動させる, 指導・評価することが重要

- 英語コミュニケーション I が終わってから II へ, 終わってから III の順序性
- 取り扱いの語数がプラス 750~950 語, 再びプラス 750~950 語と増えていく
- 共通テストとか国公立の二次試験にもまともに反映されてくると予想される

- 論理表現
 - 話すことやり取り, 話すこと発表, 書くことの 3 領域を中心とした発信力を育成
 - 場面を与え→アウトプット→自分に落とし込むこと
 - スピーチ・プレゼンテーション・ディベート・ディスカッション・1つの段落を書く・論理の構成や展開の工夫・話したり書いたりして伝える・話し合い
 - ディベート・ディスカッションは難しく考えず, まずは表現させる



外国語科の目標

- 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方
＝外国語によるコミュニケーションの中でどのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくかという物事を捉える視点
- 外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を社会や世界、他者との関わり合いに着目して捉えコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する
- 発達段階に応じて見方・考え方を豊かなものとし自分の生活、人生や社会、世界の在り方と主体的に結びつける学びが実現され学校で学ぶ内容が生きて働く力として育まれる。学びの過程の実現が、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながる
- 適切な言語材料を活用，思考判断し情報整理，自分の考えなどを形成し，再構築することが重要
- 最初から完璧なアウトプットは求めず，繰り返し適切な言葉か語句か順序はよいか無駄はあるか同じことをブラッシュアップして書きなおし・話させることが大切
- 生徒が将来実際に彼らの生活の中で英語を使う場面を意識した指導を行っているかを常に教師が見直すこと
- われわれも母語では，ラインでもなんでも伝わらなかつたら文言追加したり，語彙を変えたり，書き直ししているわけです
- 英語だと特にタフさも身に付くのではないか→コミュニケーションストラテジー
- 「日常的な話題」＝生徒の生活にかかわる話題→まさに日常
「社会的な話題」＝社会で起こっていること→日・時間によって変化
- 話題は，中学校とほぼ同じ
でも高校は深く多面的な考察が求められ，自分のこととして捉え，主体的に考える
※「発達段階に応じて」とか「自分の力で社会は変わる」とリンク

だから，言語活動において，授業において具体的で適切な設定が望まれる。自然と使用語彙や表現も高度化する

- 主体的・自律的に取り組むことすなわち「学びに向かう力，人間性等」
「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を高めるための原動力
- どう評価するか？授業で手を挙げる回数？ノートがきれいか？
- 「主体的に自律的に「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」のための学習改善等に取り組んでいるか」



外国語科の各科目

- ▶ 英語コミュニケーション＝複数の領域を結び付けた5領域
- ▶ 論理表現＝3領域（表現）：スピーチ・プレゼンテーション・ディベート・ディスカッション・まとめ文章
- ▶ 概要をまとめた表

目標			
話すこと [やり取り]	英語コミュニケーションⅠ	英語コミュニケーションⅡ	英語コミュニケーションⅢ
	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。	ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続け、会話を発展させることができるようにする。
	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、 聞いたり読んだりしたことを基に 、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、一定の支援を活用すれば、 聞いたり読んだりしたことを基に 、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝え合うことができるようにする。	イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、 聞いたり読んだりしたことを基に 、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、情報や考え、課題の解決策などを論理的に詳しく話して伝え合うことができるようにする。

- ▶ 右に進むたびに支援↓&タスク↑

(ア) 日常的な話題

多くの支援 → 一定の支援 → 支援をほとんどしなくても

基本的な → 多様な → 多様なプラス場面状況に応じて会話を発展させる

(イ) 社会的な話題

論理性 → 論理性プラス詳しく

- ▶ 内容

「知識及び技能」

- 語彙については英コミⅠは中学校＋プラス400～600語
全部、話せなくてはいけないのか？書けなくてはいけないのか？と思われがちですが、「受容語彙」として導入し、徐々に「発信語彙」にしていきましょう
授業の様子、生徒の様子を見て適切な支援につなげていく
- 文法事項に新たに2つ「接続詞の用法」と「前置詞の用法」を扱うこと
- 「代名詞うち、itが名詞用法の句及び節を指すもの」・「分詞構文」は必要に応じて扱う
- 中学校のものも繰り返し扱う
- 複数領域であることを忘れないこと



- 接続詞
 - 中学校 and, but, or の基本的もの + if, when
 - 高校 論理性のある表現のためにたくさん接続詞使うはず
- 前置詞
 - 小学校 on, in, at
 - 中学校 go to, be from など定型句
- 高校 論理性（時系列など、動詞＋前置詞、名詞化した動詞＋前置詞、前置詞を含む慣用表現）

「思考力・判断力・表現力」

- 日常的・社会的な話題について、聞いたり読んだりして情報を整理しながら
 - (ア) 的確にとらえる、自分の考えをまとめる
 - (イ) 話したり書いたり自身の考えを適切に表現する
 - (ウ) 伝える内容を整理し、話したり書いたりして、明確にして、情報や自身の考えを伝える
- 実際の授業活動に落とし込むレベルで技能統合型で示されている
- 即興性を求める場合流暢さベース
 - よって専門的なもの、高度な内容は最初は避けるべき
- 即興で話して伝え合う活動においては
 - 一度では身につかない前提で
 - 中学校の内容を、継続的な言語活動において発展させる
 - 既習の内容を引き出す工夫が大切

まとめ

- 課題として高校普通科
 - ① 大学入学者選抜に向けた対策に傾注
 - ② 知識伝達型
 - ③ これまで改善してきたが、しかこれからは主体的対話的深い学びの観点から改善していこう！
- 英語で授業をやることためらわない！
 - 大丈夫、きれいな英語を話せる人は実社会にそんないない
 - そもそも、きれいな英語って何でしょう？
- 他教科連携
- 教材は技能統合型
- 目的・場面・状況設定しましょう
- 言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確にする
- 小中高連携



参加者のみなさんへのメッセージ

- ▶ なかなか成果が出なくても、学習改善を継続的に行っているそういう生徒いませんか？
- ▶ どう指導・評価しますか？
- ▶ 今後の課題は指導と評価の一体化をどうすすめるか？
- ▶ 高校は小中を手本にしなければならない⇒でも、高校は科目がたくさん
- ▶ 観点別評価は新しくはじまるわけではない⇒評価の観点が再整理されただけ
- ▶ 悩みは抱えずにみんなで共有していきましょう！

おわりに

伴先生の説明はいつも丁寧で、そして表面的な文面に留まらない、その根底にあるものを示していただけます。僕も大学の授業で学習指導要領を扱う時、ついつい「言語活動」「見方・考え方」などキーワードの穴埋め問題のような形で指導してしまいます。まさに、主体性からも、思考・判断・表現からもほど遠い知識伝達型……。でも今回のお話は、日々の授業を常に念頭に置いたもので、

これまでやってきたこと

これからも続けていくべきこと

これから変えていかなければならないこと

が非常にクリアにイメージできました。

僕は「現場では」という言葉が正直好きではありません。1つ目としては、中学校で授業したいな～という叶わない事実へのジェラシー、2つ目は、その「現場」がどこを指すのか不明確であること。最後に、もしそれが学校や教室だけを指すのであれば、確かに表面上は見えにくいにしても、いわゆる「現場」を少しでも楽にしよう、児童・生徒の学習をよりよいものにしようとするたくさんの人が関わって、少なくとも僕がよく耳にする「現場では」はそういう人たちを排除するような文脈で用いられることが多かったことです。僕も中学校教員の時は、若かったこともあり「事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！」みたいな発想だったのかも……と猛省しつつ、今回の伴先生のお話は、青森県の先生が正しい新学習指導要領の理解に基づいた、児童生徒のための指導に当たることができよう、陰ながら、でも「現場の」先生方と同じ熱量をもって支援している愛情？情熱？がひしひしと伝わってくるものでした。日本アカデミー賞の助演俳優賞は、鈴木亮平さんと清原果耶さんでした。僕から伴先生にスパルタンイングリッシュ助演俳優賞をお送りしたいと思います。伴先生（伴先輩）、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

(文責：佐藤 剛)